

米水津村の出稼 (一)

反物行商

市野瀬

仁

(会員・佐伯市長島)

米水津村の出稼

大分県の出稼者は、新潟県を中心とする北陸四県に次ぐといわれている。また九州の中でも熊本・鹿児島とともに最高の出稼県である。とくに、県南のリアス式海岸地帯で耕漁によって零細なくらしを立てねばならぬ人々には、出稼はなにかば宿命的であった。「豊後土工」とか「佐伯稼業人」の名は世間によく知られている。しかも、その歴史は古く元禄時代熊本県五木地方の鉾山に、色利から山越しの畑野浦(蒲江町)出身者が集中的に働いていた事実がある。(三浦保寿『豊後山師給源地方の歴史地理的研究』)以上(古庄ゆき子「豊後おんな土工」)出稼にはいろいろの業種があった。

例えば、土木工事・炭抗夫・椎茸生産・樵きこり・材木運搬・杜氏とらじ(酒を造る人)・日傭・紡績業・名子等である。この外に、佐伯地方にあまり見られない反物行商の集団が、わが米水津村にあった。これは特筆すべきことである。

時は明治の来年から昭和の初期にかけて、北は樺太・北海道へ、南は宮崎県・鹿児島県へと南北の地を選んで行ったことは大きな驚きであり、かつ、疑問と興味をそそられるべきことである。

反物行商

北海道の歴史

どうして北海道へ反物行商に行ったのか、その疑問に

答えるために北海道の歴史をみてみよう。

江戸中期以降、内地の水田にニシン粕の使用の普及で北海道西岸のニシン漁は急速に拡大し、九十九里浜・五島とならんで大漁場となった。また長崎を通じての対中国貿易の発達はナマコや昆布の加工増産をすすめた。

幕府は対ロシアとの関係のため、太平洋沿岸の開発後、日本海海岸の開発に努力したので、ニシンの豊漁と相まって北海道の海岸は著しく開け、移民は増加した。とくに、明治になって漁業は大規模となり独立小漁民と対立が生じ、漁場は北上する傾向をすすめた。

明治四年（一八七一）廃藩置県の年、政府は開発費として、国庫から向う十カ年間に一千万円を投下することにした。明治七年（一八七四）屯田兵制度を設けて開拓指導にあたる人材を養成し、石狩平野に礎石をおいた札幌を中心に内陸の開発に努めた。こうして農業をはじめ北海道の特徴をなす鉱・工業開発の基礎がおかれ、北海道の開発は内陸に向って伸びる基を開いた。

明治十九年（一八八六）北海道庁が設置されるや、開拓の直営を止め民間の企業を誘致してこれを促進することにしたので、事業家・移民は雲集し開拓は非常な進展

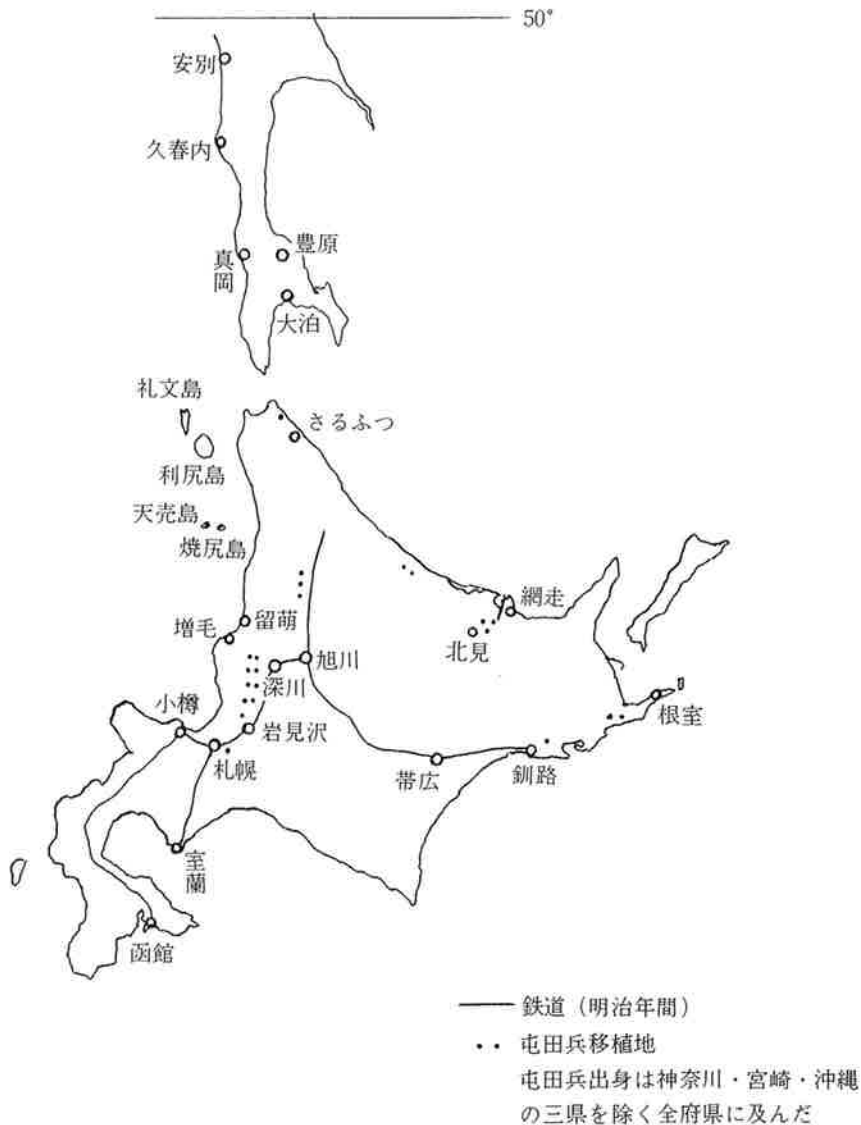
をみせ、明治三〇年代には農業が従来唯一の産業であった漁業を追い越し第一の産業となるに至った。

ここでこの間の人口の推移をみてみよう。明治十九年（一八八六）～明治二十九年（一八九六）に三十万の人口は七〇万にふえた。明治十九年約二万町歩の耕地は、明治三十九年（一九〇六）には三八万町歩に増加、同年人口は百三十万となった。

こうして明治の末期まで開拓地は、全道にゆきわたり鉄道網の基幹も北海道は一経済圏にまとまったのである。そして、日清戦争後、台湾領有以来、北海道は資源供給地としてよりむしろ過剰人口の吸収地として重視されたが、大正末期には未開地開拓は頂点に達し、日本資本主義の完熟とともに鉱工業への投資が大となり、大正七年（一九一八）には工業が第一の産業となるに至った。（日本歴史大辞典「河出書房」）

出発から到着まで

旧正月の二十五日のお籠こもりが終ると出発する人達もある。三月の春先に行く組、五月の茶摘がすんだ頃出発する組と大別して三期に分けられる。いずれも、日本海沿岸の



ニシンの漁獲がすみ、漁民の懐が暖くなった六月頃をねらって行くのである。一部の連中はニシンの漁獲に加勢する者もいた。大正年間には米水津の北海道行商は最盛期であった。当時米水津を出発する人々の中、浦代から約五十人、竹野浦から十数人、色利から十人、宮野浦と小浦から二、三人であった。

大正五年佐伯駅ができるまでは、葛港より広島に着き山陽線を利用する便もあった。やがて葛港より直接神戸港へ着く。佐伯駅ができてからはもっぱら汽車を利用して三ノ宮へ着いて仕入れ先の京都へ向う。

仕入をする親方組や独立行商人は、衣類の種類に依じて産地に行くので、売り子と違って北海道へ着くのは遅くなる。昭和二年、小浦の渡辺定は佐伯駅から小樽まで十九円五銭であったと記憶している。途中、東京に下車して連中を待つため、宿泊して浅草見物をすれば五日ほどかかったという。

京都で羽織・袴・紋付・帯紐、名古屋でメリヤス、八王子で^{ひざ}袖・袴地・銘仙、秩父の銘仙の高級品、足利で人絹生地、米沢で反物・袴等を仕入れる。親方組はおおよそ千円から千五百円位仕入れをした。独立商人は二百円あ

るいは三百円、人それぞれであった。仕入れの払い半分は現金で残りは替為を利用した。仕入れた品物は小樽へ直送する。

行商の風景

小樽の九千代旅館に一同は集まり、各地のニシンの収穫情報をキャッチしておく。親方を中心に協議して後、売り子は親方からピンハネされた金額で品物を受け取る。こうして西海岸の漁村を目当てに出発する。留崩・増毛にはよく行った。

当時、小樽は重要漁港地であるばかりでなく、小樽・札幌間は士族屯田兵を集中的に配置した、国の政策上重要な地域であった。ために、小樽―札幌―岩見沢間は明治十五年までに鉄道の複線化が完成している。砂川―深川―旭川は明治三十一年に複線化が完成・オホーツク海面に近い北見（大正元年鉄道敷設）は平民屯田兵の拠点として開拓の進んだ地域であった。この付近の鉄道敷設は大正元年から五年、おそい所で十四年であった。

ニシンの漁獲は北海道西岸の漁民だけでなく、津軽・秋田・山形等の漁民の出稼集団が大挙してやってくる。

反物の売りつけ先は、北海道に永住した漁民が主で、外に、屯田兵や出稼集団の漁民と交渉することもある。

行商人によっていくらか違うが、大方の商人は深川に荷物を全部預けておいて、八貫から十貫ばかりの反物を背に一軒また一軒と歩く。

紋付・袴は軍隊の入隊記念に売りつける。銘仙・絹物類は結婚衣装として売りつけることが多かった。値段はさまざまだが、羽織は五円、袴は二円、紋付は五円〜二十円、帯紐二円である。

狭隘な米水津の地から二三〇〇km（小樽まで二三〇二km）も離れた広大な異郷の地で、とぼとぼと商う姿を思



女性の行商姿

うと、さびしくもあり、生きるための厳しさを感ぜざるを得ない。

行商は明治の末から大正・昭和の初期まで続いた。この間行商人の服装も変った。足元も草履、地下足袋、ゴム長靴のように。また、いろいろの目にも合った。熊がいつ出てくるかもしれないので、馬に鈴をつけ、ラッパを吹いて歩いたこともあった。宿屋に泊ると五十銭、農家に宿を借らねばならない時は、それ以上払って再来を約束した。地元の人から、米水津行商人に出会うと、「九州ちよる」の人ですと話しかけられたこともあった。

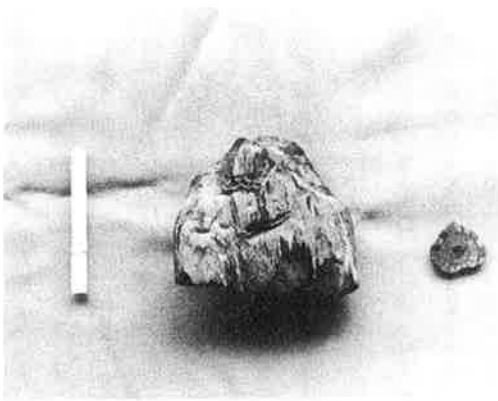
行商人は四十才から五十才代の人が信用があった。比較的経済に余裕のある行商人の中には、夫婦で行くとか自分の娘の子をつれて行った人達が何組もあった。浦代の永野タセは男に負けない商人で一人で大きな利益をあげたことでその名がとおっていた。

樺太方面へ行った人は小樽から出帆して、途中天売島（てんうりしま）・焼尻島（やきしりしま）を周ることもある。北海道北島の利尻島（りしりしま）や礼文島（れぶんしま）はそれぞれ一日がかりで商う。

二十才の頃、父につれられて行商をおぼえた色利の塩月駒一は、大正五年から十二年の間、二回樺太の土を踏

んでいる。八八才の彼はすらすと樺太の地図を書いて商った所や大きな町の地名の説明をしてくれる。真岡・泊居とまりおから久春内くしゅんないへ、北緯五〇度のロシアとの国境にほど近い安別あんべつへも行った。

樺太行って驚いたのは、松喰虫のため一面の赤茶けた樹々の風景であったという。安別から帰りに、真岡まおかから豊原へ横断の途中のこと、川上炭田から放り出された



化石

石の中に、大小いくつかの化石がころがっている。記念にと思って、小さな杉の化石と貝（アンモナイト）一億五千万年）を拾って持って帰った。宗谷海峡からオホーツク

海に面した北端は、ニシン・はたて貝・昆布のとれる所。この付近は大正八年から十一年にかけて鉄道が通った。この地に「さるふつ」という寒村がある。宮野浦の渡辺善助はこの地で生まれた。父は漁業していたが、彼が九才の時六一才で亡くなった。祖父は渡辺善七という。戸籍に「北見宗谷郡さるふつ村浜鬼志別番外一」とある。祖父は親分の名でとおり、当時の新聞に出たこともある男であった。明治元年の生まれであるが、一体どんな経路でこの地に住みついたものか。彼は米水津行商人の起源を解く重要な人物かもしれない。

八月から九月にかけて、はたて貝の収穫で漁村はうるおう。大方の行商人は「さるふつ」付近で商いをする。南に下る紋別・網走そして根室一帯は霧が深く、十月頃昆布所ではあるが、宗谷付近にはかなわない。しかし、浦代の織戸喜代蔵は根室を根拠地にして活躍をしていた。十、十一月になると大豆・小豆・いんげん豆・えんどう豆、十二月の始めにはハッカの売上げが終る。

行商人は根拠地を北見と帯広において最後の追こみである。売り子は荷物を残すと、わずかな自分の財産を抵当として、親方にゆずり渡さねばならない破目になっ

た例を知っていたから真剣であった。こうして半年以上にもなる北海道での行商は終った。

十二月の暮れから正月は帯広の旅館に集結する。商人達は財布の中をたしかめ、積った話に打興ずる。新正月の旅館では毎年のことなので、豪華なご馳走をしてもてなしてもらった。

反物行商の結果

旧の十二月下旬になると全員は、おもいおまの日程でなつかしい米水津村へと帰った。懐ぐあいは様々であった。儲けた金をバクチですってしまった人もあった。

正月の浦代の港では金のキセルを角帯の腰にさし、イキな姿でねって歩いたのを知る人はまだ何人かいる。反物行商人がどうして多かったのかという理由に、外の業種よりも服装がよく、仕事もきれいであったからだろうという人もある。

三十年間近く続けられた北海道行商人の中には様々な人間模様があった。このことについて、いくつかの例をあげてみよう。

一番儲けたのは浦代の織戸宝作であると誰にたずねて

もいう。現在、佐伯印刷会社社長平岩弥濤治の父藤一は札幌の中央に札幌第一ホテルを経営した。彼の兄は天塩の音威子府おとしいねづかで衣料の卸屋を開店した。堀川菊松は小樽で製麺工場をもった。岩切佐四郎は北見で衣料品店を開き定住した。

竹野浦の福永九重は二六才の頃行商で儲けた資本を元にして、ロスアンゼルスに渡り、イチゴの経営で成功し彼の地で百三才の生涯をとじた。

宮野浦に植田フジ子（七六才）という人がいる。彼女は宮野浦出身の植田実と樺太で結婚して、二三才の時この地に来た。

色利の塩月駒一の述懐はこうであった。「あの頃は平和であったよ。人の前で反物を広げて商談するのだが、ただの一回も盗まれたこともなかったからね。ときに私は、国後島くろしりの南端みなとの泊で関東大震災を知ったんです。それを契機に北海道の行商も下火になったと思っっている」と。

現在、佐伯市で衣料品店を開いている中で、米水津出身の多いのは行商を経験した結果であると村人は言う。

明治29年 4,828人
 36年 5,065人
 大正7年 4,864人

二つの疑問

		営業税配賦議案	
大字 人数	年度	明治 30年度	明治 37年度
	浦代		97
色利		37	38
竹野浦		49	24
小浦		3	7
宮野浦		7	11
計		193	146

今まで述べてきた北海道反物行商は、大正年間の記録である。ところで、「明治三十年と三十七年度営業税配賦議」と大正年間の「県税商業税等級別人名」というのが、米水津役場に残っている。すべて人名の下に太物（絹織物を呉服というに對し、綿織物・麻織物を総称した語『広辞苑』）で扱っている。

大正四年から十五年のものは、現存している行商人経験者の話と全く異なるのでこれは省略することにする。

この表で分るように、村の人口に比して多いことに気がつく。実際は妻や子はこの数にはいってないので実数はもっと多かつたことになる。

惜しいかな明治時代の米水津行商人の風景を書物や人が語ってくれないのである。

さて疑問の一つは行商人の行った明治三十年には鉄道が小樽まで全通していないことである。しかし、明治二十三年から陸軍省の経費で大規模な屯田兵を送るようになった。それを追うように、明治二十四年東北本線が貫通している。そして十年ほど遅れて函館—小樽間が明治三十五年の完成となる。

実は海運については、西南戦争後、積極的に汽船による西廻海運の進出をはかっていた三菱の岩崎弥太郎と、政商三井のはげしい競争による時代であった。ましてや国家的事業であるので、青森からへの海運による輸送はいとやすいことであった。明治十三年買積船（買積みを経営の中心にしていた帆船）の北海道に入港した日本形商船数はじつに二万—三七〇隻を数えたというほどであった。（高倉新一郎「北海道」）

次に第二の疑問は、何を契機に北海道へ反物行商に米

水津村民が行ったのかということである。

この点については、先述したようにオホーツク海に面した北海道北部の寒村「さるふつ」の親分渡辺善七の漁業出稼である。ニシンの豊漁と開拓移民の入植の現況をいち早くキャッチした米水津漁夫の機敏な行動であろう。実は大正年間に米水津村の外に、色利と山越の畑野浦（蒲江町）の数人、竹野浦と山越の羽出・日野浦（鶴見町）の八十人ばかりが行っている。これらは、親類縁故から友人へ広がり、所謂、地縁・血縁の關係から集団を形成していくのはごく、当然の成行であろう。

このことに関して、もう一つ傾聴に値する記録がある。それは（織戸健造著『織戸姓をたずねて』）によると、「たとえば豊後織戸氏が北海道に見えるが、この織戸氏はその発祥地の大分県南海部郡米水津村浦代浦から遠く日本の果ての北海道に移住された時期は明治政府の北海道開拓時代である」と記されている。

米水津村はU字型の地形にまとまった村で明治以来、合併の経験がない。村は魚の干魚ほしかで上方との取引もありとりわけ漁業の先進地紀伊との交渉はひん繁であった。こうした事情から、全国の情報を早く知り、他村にさき

がけて北海道へ進出したものと思う。

それにしても海に生きる者の進取の気象と、追いつめられた貧困の前には、機械文明の発達した現在人は想像をこえた行動範囲で生きていたものである。

・語り手 塩月駒一（色利） 塩月 司（色利）
織戸増一（浦代） 渡辺 定（小浦）

・文中敬称を略す

・この文中に誤り若しくは補足する点がありましたら、お手数ですが、ご連絡いただきたいと思います。「米水津村史」にこのまま記載いたしますのでお願いするわけです。

羽柴先生売捌き預かり本

1. 蒲江町史

2. 旅と伝説 全三十三巻 1. 2. 共に新本

購入希望の方は事務局長清田まで